



句法切字
手紙波傳
中村俊定文庫
文庫 18

中村俊定文庫
文庫 18
596





俳諧枕草子

疑詞ハ

何 イツカ
イツカ
イツカ

イツカ
イツカ
イツカ

イツカ
イツカ
イツカ

イツカ
イツカ
イツカ

イツカ
イツカ
イツカ

イツカ
イツカ
イツカ

何處

イツコ
イツク

ドコ
ドコラ

何路

ドイチ
ドイチ

何程

ドホト
ドホト

イカカリ
ナニホト

何

ナニデウ
ナニデウ
アデウ

何為

イカセシ
イカセシ
ナニトセシ

ナニカセシ
ナニカセシ

何様

ナニサマ
ナニサマ
イカサマ
イカマウ



何耶覽 ナニマラン 奚 イツクシツ 誰 タカシ

幾 イツクハク イツクソバク ソクバク

イツ 何事をいつともいふ松の月 梅丸

イツカ 遠き東に川流るん年の海

イツレ ちろろのいつき成切れ性も

イツラ イツラ ころころと小瓶につくさるる

イツチ 意風成起りつら虎毛袖

イツコ 夜の宵の約乃いつこよ

イツコ イツコ 玉の救産に幸いつこ母の世

イツク 台船といつては流るる水舟

イカニ いかで紅小ハ咲く香の梅

イカハ けいと入るるいと未用紅

イカホト 七暮りお空ハいつかと流るる世

イカナル 空海を中していつともは夏と秋海棠

イカカリ 氷とハいつともは雪く香の舟

イカセン

いふめん月尺ゆきく朔日不二

イク

年もくわ点の子後ノ幾ノ子

イクワ

礼死を僧堂ワ候一ノ礼

イクハク

幾く乃ゆふアモ一水心花

イクラ

折句

枯くくくくくくくくくくく

イシラ

並をわのくくくくくくく

イカテ

いしりくくくくくくく

光

雜作の四角一の筆の夕化粧

タカ

艶も女をくくくくくくく

折句
タカ

詠うくくくくくくく

ナニソ

何りし力もあらん 元え

ナド

村中とあゆむ恨らん月の西

ナド

とくくくくくくく

ナント

我未ぬ角のらん賦を赤野

ドノ

この麻の通ふくくくく

ドチ

常らに公時あらんくくく

ドコ

風の船楫を流くくくく

ドコヤラ

万の山をくくくくくく

重款ハ

この浪をよ何れ身と添ぬき 法雨

東海の花と四つ沖の華 来儀

阿きの管、海にわ小舟花 梅丸

く水一沖之難時をきてく

川 群の香く山の細くし

老の耳也の蚯蚓の鳴ねを

離き悪く月之屋をの神屏風

山をるこれの守子と師道

幾とあは海一海一舟浪

浪の宿の波のうねり氣比乃海

疑のうけハ 字ノ音 可一と
らん 上ニ見

まよと開く波をえり宿解川

け川と終る岩中しと鴉一羽 一舫

岸をそ幾度までけ然 田 梅林

ふか葉の冷くはあつと松の露 梅丸

麻のく山をうねりく花うね

ふきくし山より雪を声あぬ

ク ス ス ス フ ス

フ ム ム ム ム ム ム ム

源水やむくふこり清き
うま位じく馬馬宮と月雨
ふおとと入るやうん飯の後
新のんも言へけいし麻の香
あゆみや中におる房水
意梅の新月とる新乃つま
名月、休とる、髪の照る
不二の雪とるやぬくき梅の鼻
秋後、あゆみやもく起る梅

梅林
梅丸

シ シ ソ ソ ソ ソ ソ シ シ

空を足てあふさる足程
け浦、縁かうをー、流の秋
修氣、と説かひいを痛あ卯
寺寺とるうらやと、あね花
うれ野、と流備し、あの花
梅咲より、あね花、あね花
図雨、と切とく、あね花、あね花
穴とどく、あね花、あね花

孤杵
梅居
枕石
梅丸

に合の多ふハ

△
本の字や中少しを記す

おし入つ月の輪のまゝ子親

福妻の鏡橋と目つけけりまの

糸日の麻くくり記す子本橋

お久し忍る假名ハ

これを略しハ
久しあハ

多風くまハカク

此物

國字子

庭いふ記名ハ燈く卒の段

梅丸

け法書之易きハハ反 梅

菓子如阿も書ハ忘るる事

月丸しに浮る地ハ

これを記すハ

かま石く け報摸のくくは音に枕ハ記

茂蘭

二字切ハ

蝶のまじ糸消戸の中を舞ハ福

既醉

新くくく和尚と拂子投くせん

李庭

花士よハ牛ハ牛ハ多解川

此柱

おはくくハ常ハ常ハ常ハハ

梅丸

花しハハハハハハハハハハ

△
冬夜湖景
夕の月を流るる河の紅丹烟

蘇我の土著、魏世姚黄、
風を手にし、金珠の言、
あまのついでとせり

焼帛の山田の衣、松もぬれ

終るる心、門の戸も、しるしの雪

二字切ハ

子をくくよ、首兵、はぬれ、しる、前

心切ハ、思ふくふふの中

二行切ハ

高き山、又、高き山、花の、
正一庫

梅子の眉と、かぶり、二日月、
梅丸

二行切ハ

ほくく、文、阿、鴨、川、の、あ、は、は、し、
李由

冬夜湖景
一、鷗、と、一、月、影、は、ぬ、所、
梅丸

二行の、切、ハ、
尾、長、き、き、
尾、長、き、き、
尾、長、き、き、

尾、長、き、き、
尾、長、き、き、
尾、長、き、き、
義鳥

尾、長、き、き、
尾、長、き、き、
尾、長、き、き、

中、行、の、切、ハ

月、の、日、の、く、ぬ、糸、と、細、伐、も、
来儀

牛乳不... 此英子

聖之... 英二

宿之... 李庭

山... 宗雅

夜... 御風

多... 葵道

多... 馬鬣

ぬ... 梅居

大... 梅居

月... 素水

粟... 兔耳

折... 兔耳

白... 茂楓

ま... 浴躰

美... 梅丸

輝... 梅丸

袖... 梅丸

下... 梅丸

△ かく海の松ハむらと備まで 翁

顛倒ハ おの切字のナカも多しん
そハ切字

上段

園子も地ハ入えけを乾の宮 李子庭
吹きしく燕も成り 梅丸

中段

おらん子京の春をさへ絶句
無名の切ハ

又はよま子一日めして思はし
世をうつる人ハそとも浪跡の跡
輝きて川に流る水

おのの月を波うり波入 梅丸

かたりゆふくハ てみとれ
こしの

十徳の二つ袖の涼 小由

湯心置あ あつと 湯と秋とぬぬ子 茂蘭

けし海も恋も あつと 口ナし 梅丸

榎焚ん帯張の跡のゆりやを

ひらる梅も宮へくとのと

ふかふか あつと けしくはめとハ

云うけゆふくハ

△

野々女しき凡の方に取貝 鳶光

踏よりよるはち中あつし梅 馬京

梅の戸れ海舟の別し秧籬ぶ 梅丸

綿の五枝もくれあふ糸の糸

双圓

陽焔の日向しき記帳のこゝ 鳶光

くろくえんを糸波

学らんおニ文りけそハ又後了 茂蘭

やどのもわらうけてごえん 梅丸

草のまはら鳴てる歌ふ世も

倒装ハ 又名顛倒

社ウケ 社ハ社下子叫らよ子規 既醉

けしけし月をすそく梅丸 可卜

志しれも鼓可化嘆あ夜月 梅丸

錯綜顛倒ハ

己火と木この堂のまの宿 翁

或人大よひ文と花とを二作

あつとあつとあつとあつとあつと何

影畧互現ハ

一、世々しく常し高き花の香カ 千代
 牡丹芍薬のゆきよしゆきよと 涼鬼
 室の軒とつゆのしめくしゆ梅 玉思
 たるとのまはのふりしゆ乃梅 梅丸
 小田のよれ表屋は病しゆの香
 見えぬるしゆ梅ハくんと花
 用影略互現顛倒二法躰ハ
 牡丹らくくよ室のふりよ
 一、

用錯綜顛倒伏疑釈二法躰ハ

結巻ぬ取は中くふ梅ハ群、 梅丸

月のまお好くをよる紅紫餅

奪胎換骨の法ハ

扶竹方や秋を色く此菊の香 くらく

藏頭ハ

しくりハゆき子と日枝の山嵐 雲花

ゆきやせしゆ人まを梅羽 梅丸

復次く不定せよまの雨

藏尾ハ

樽等の菓や総指ぬれを

一換投切ハ

宮と酒と買ててむし庭の果

蘇れハ不二草花ハ筆に秘花子

穢を虫く斬んで早の鳥を

月と梅歌もくし赤ハあまの毫

狗小骨折らさるる聲もあまの毫

色まハ

まも海や羽白鳥野赤く

白魚の柳ハ青く一墨田川 古 宗瑞

隠顯法 赤坂小舟ふんくくり夕る音 茂蘭

同 夕鳥の霞く葉けく是牡丹 梅丸

實字の切ハ 畧ノ出

其の宮山を菊く種くもと 梅人

福来子鳥帽子の紐と毛糸 八中

夕涼菊も水と一柳 抄 錦岡

西の島くくも一紐も葉木に 梅丸

△
月の重しをそめ風ハ吹かす
何れ蕙をよむの海へ入るるぬの
荃月秋のつらき聲乃秋
元々意暖いし秋乃境
飛し能無んやとて長局
海をぬきき宿ゆら文家
ておに波の切ハ

研石

忘る海乃片隅に舟ぬ人
昔人如骨も瘦れて秋

銀江

△
公甲お麻火くわえて秋
鳥訓きし一箇にわらうに文時雨
朝日さけ雲ゆきとくけは松の花
と一つ言けと柳くく三日の月
紅い葉をさす持ゆははる飛
名高し揚く速くくに角力中
夕月の淡えとて床乃書
鶴とてうとくしうし
結く信れぬき紙花ハ

祢直飯も懸け、根のか座の園

畧語の切ハ をきまのうに
河とくわじ

シテ 以子じゆるもそらうと麻の色 申提

モ 事いしらふぬりしや羽ぬけち 眠石

リ 落るし甲らうし屋ハるさうふ 雲花

シテ 片板ハ水浮球あしにその板 錦水

モ けし能乃凡るふ海はの色 梅丸

ル 白の利しぬ三味線すもまのあ

テ 山指ふ又けりおれ指る

リ 表倉にハ家川りふたよあ

テ ありし風好しとるふあ地

テ 意れとハくらとてサ蘭の亀

イ ながしに赤糸程もそふお

テ 尾さか度、くまか麻の麦

シテ 夜よけけりそあもそんて夜禱

リ お福ハい直りうふか丹 鷲

モ 茶の花も心ハるの麦の冬

シ 宵園小松のむのむつうな

送字の切ハ

夕照の澗田を照らす初め白
風吹ぬうれく糸の瘦

枕詞の辨ハ

やまうらむ罪はくまきぬの月
鈴やうらぬれ月し明を
角のしづけ伊勢の秋中思ふや

五七五詞ハ

山体と山の葉内や山のサ

朝倉や船態の山ろ細
ひくく後をかえり歌書
猿成の猿とあつてゆきも
いそぐくし切る人の石の家
磯子より

奥の國 廿五部にも月一ヶ月の音

送る火下から海より萩の風
ちり花の春のいびにゆきくを
月庵

改人の
花の丸
よまはさうしゆさうしゆ世のかり
梅丸
兔道

反詰山谷の拾ハ

くしきしき梅や回とてはありき 千代

花梅の雪やうきくをあらけ 梅丸

りゆふくと夕日と色む牡丹さ 湖月

夏とハ鈴り乃藤やわんう系 此英子

うこくらの下しあらし毒のま 芭蕉

人をつさ水ももろし梅のま 梅丸

秋羽りくよ乃軍ふ名れハ 源二位

大と忘うつと鏡ん乃心取 海

稀くつあふ題ハ 畧也

子と其の梅うを二んや修習涌 國字子

湖煮の冷のまゝ葉をま山椒 朱儀

るちんや遠くちろくする合の音 風葉

と仏の声いりうふや邪り鳥 茂松

石のねもくくや 仲 鈴

繖くのちももし花や綿 烟 馬鬣

胡蝶のし物ゆい 山 桃仙

草の芽さくけりよまきあめの上 梅鏡

スミエ川

子りう

草水より一葉もはらふ凡の音

清く日よぬいと移りも松蔭

亀淵

蒲公の及も蛇くけらちり足

白車

本堂に集る旭も繪鷗の如

梅東

糸身之麻をなすもさきく

梅丸

耕ぬ乃淋とちひや為氷

意婿れを又氣やちり

化保非之條し干るる八滝の糸

お臣らと末長溪の緩糸

春

厚氷ふとさくよきの日あり

年形のそいもぬく玉に咲

一ふ船の庵く和し常陸帯

梅の後更小御後経の糸の葉

よきのほく秋の木の葉かや天杓遠

吹く度小石の端に貴妃梅

阿素波やえつ丸山うもく鳥

小止乃そも月とつけ北斗の蛇

世より一日の月の跡

ラタキ
天杓宴

御燈

夏

燠寒小梅了んさき櫓ふ
川液の流るる経る色も
人ハ内ニ供む以るる地を
竹濡まつゝ水蟻乃衣く
夏切の衣の多し一麻の
唐の巾着もさき日く九夜
色の子れ十もはしし
柿葉くくうけゆく夏之
壳も海糸一ツ梅乃枝

北野
六朔

二夕ハヒノ花ニテ
作ル又夏櫓ハ
ムメノ多ク

うたつゝをすれハ衣や
草の戸の思るに月の夏水
申入る雲如字一扇の糸
此を茶を君もつを
白くつらつれし海の
花つゝさきふは都の不二
ゆえ乃きりしお
を人の徳有古
ゆえ乃不二や

秋

△ 胡糸も切はる胡糸の湯

管のつらむしを 遠 渚

小舟も鍾の秋紅乃を月胡

酒も何小碗やう糸く秋尚棠

御吳糸

胡糸に咽ひしやう王の鼻

絞糸も何し扣くを糸く西風は

己ゆ突に己う極く担敷子

角糸の延糸は髪千と夕日乾

と糞を破く吹くれし化一草

行名

糸の尻扣く不糸と角力り

曰

沖風の直くをひ司の糸が

糸く時と目糸く糸の取法談

糸く糸の糸か灯籠に糸極小

糸く糸と糸く糸の糸大柿

糸く糸の糸糸糸糸糸糸糸

糸く糸の糸糸糸糸糸糸糸

糸く糸の糸糸糸糸糸糸糸

冬

糸く糸の糸糸糸糸糸糸糸

ハヤ

え母にめくは多しと宮の礼
お癒に国をう角の汐干は
その日の短くもくはうの乾
あそくは物ゆ月く桂木店
芦鴨の枝におとくをきり
着る水うつさ易くおを踏
名料いの血と夕日の女は糸
味物おやのうんくぬく見鳥
宮をまじりしとくは午と文附

出土牛

びん

総角ららぶ家ハ多き物ハ
庭燎多かぬの細くうりくぬ
夕風を伴うの虎めきつし
竹を浅る月と多くは虎の色
おぬ物を岩小浜病の虎の妻
きりも力をくくも怖くうの書
水れはく物おふくく人の書
うれ違わぬは痛むのうも
場うくと毎のぬや彼きり

字ニ後海ニ文
ラス人ニサレト
をを虎鬼モ
何の怖スコラニ

埋火の烟まきかききききき
暖くもおの踏おききの水
平軽ておあふくあ子まうさ
一葉の人の酒りの烟火桶
山菜花のわらうにあらまを印
石より水泉の使のを牡丹
鏡のまきて帯くやを丸け
世のわらふあれ貴屋陣
妙多講のたへてりく

古雅辨ハ

魚好賛 秋の輝の白くは祝ふ向をげくは山
渡河夜泊 那すむお佳かききハ後うはれおき
題柏水 系もろ水のそぬあまの極のちれ
衛門櫻 くとんあまをりあまの味をたぬ
題窗下 老蒼樹

解字の辨ハ

何うさうと身し水に梅のいし
治のぐれ鳥を誇るそまのち
むいくニをかさねて 初程

宗瑞

梅丸

△ 嬰^ホ子^ホの指^ホ 志^ホ好^ホ玉^ホ松^ホの

公^ホ人^ホ志^ホを^ホ醉^ホを^ホり^ホく^ホ交^ホり^ホを

さ^ホる^ホは^ホさ^ホゆ^ホま^ホと^ホく^ホ何^ホを^ホら^ホん^ホ何^ホ

この冬^ホも^ホ浪^ホ里^ホの^ホ舟^ホを^ホり^ホし^ホ候^ホ

諺語の歌ハ 畧出

コトニエカワ^ホ蝶^ホく^ホれ^ホま^ホり^ホし^ホく^ホ糸^ホ此^ホの^ホ糸

唐人^ホ子^ホヲ^ホお^ホし^ホ帝^ホく^ホ道^ホ州^ホ外^ホの^ホと^ホく^ホ玉^ホ鳥

貧^ホス^ホ六^ホ純^ホを^ホ矢^ホさ^ホへ^ホ逆^ホに^ホか^ホま^ホて^ホく^ホく^ホが

伴の歌ハ

月^ホと^ホらん^ホと^ホ白^ホ雪^ホの^ホ巻^ホり^ホ那^ホ 此^ホ英^ホ子^ホ

泥^ホ魚^ホの^ホ浮^ホく^ホ時^ホ辰^ホの^ホふ^ホき^ホら^ホる^ホ 此^ホ松

志^ホ屋^ホの^ホゆ^ホき^ホゆ^ホく^ホま^ホお^ホ門^ホ柳 鶯^ホ言

日^ホ一^ホ日^ホ曲^ホら^ホぬ^ホ物^ホを^ホ帯^ホり^ホか^ホ 梅^ホ明

白^ホ州^ホの^ホ極^ホと^ホ別^ホ一^ホ山^ホく^ホ青^ホ 竹^ホ露

名^ホ月^ホの^ホ延^ホき^ホら^ホお^ホし^ホ思^ホハ^ホく^ホ 起^ホ友

明^ホ月^ホの^ホ飛^ホた^ホり^ホ鳴^ホめ^ホけ^ホお^ホ戸^ホ 孤^ホ竹

鹿^ホ尼^ホを^ホら^ホ人^ホ目^ホを^ホく^ホれ^ホを^ホお^ホの^ホ中^ホ 抱^ホ玉

質^ホ一^ホの^ホ金^ホを^ホく^ホく^ホせ^ホる^ホ梅^ホ居^ホが 梅^ホ居

郊^ホの^ホと^ホお^ホその^ホで^ホある^ホ竹^ホの^ホ庭^ホ 如^ホ甲

△

岸の河しを多えりし柳花 如蘭

英一や虎の威とくる年治 梅丸

おきの舟の中くし美人さ

かしくらの口は流地し一じし

物おりの星の例まきそ火か

そよめ河の二用ハ

傾津と後して見えお端まけま

せりしに小神をそくは危のま

名月の金紙拾はるや羊 梅丸

木端

梅丸

カ タ

イヨ
イヨ
イヨ

梅の詞は二部ハ

是しれ舟の言やおのま 彩虹

てん舟の行はまよや 年の月 梅丸

梅のしし雪まおしる古山花

杉屋の流しとわさじし 梅

人ハ杉。寐てまけを梅一お

濱底の二行ハ

夕月の秋あしそあし 濱底

氷骨足ん揖はれ流の濱底

法

喻

コレデ
モメタ

コレデ
モメタ

斗の二品ハ

福尔の子をくわいハ後げ地

漢言も後くわいハ字のル

理の刻ハ いふ所をよむと

後らふ所 いふ所をよむと 極くハ況の極をのりし

中この三変ハ 一ハ三ノ至 前ニタリ

敢 ニ花ラ 活ラ女トス 水心ハ極し中く いふ所をよむと

一ホ 一ハト 月を免ハ中く涼ト輝ハの美 兔月

遊治り子し中くヤシ いふ所をよむと 木丸

回の三品ハ

下野行苗田畔塔田く伏石の絡り

雜句畑白川の風やれし草 田

園極田や陸帯おハ極おりり

新潮のそ波ハ

お波の星し流りてを垂し 茂蘭

袖波や東風うけ糸の破列松 梅凡

若葉の花の紫ハ 蝶夢タ集ハ 昨ナリ

夕久くや若葉の紫く 泣く露

るも喰い海とよあふのねる

初鴨ハ

田歌 尚ほあり

初鴨や焼くも是れはむしをこり

表の詞の口ふハ

情^{レム} 旅行^シ 河^ノくれふ多^クの足^ハひふ三日の月

俗^{ニム} 一^{トシ} 節^ノ日^ト 焚^ルも 春^ノを ば 季^ノ 明

通 里^ノの ぼやあ^ハわ^レお^シと 牡^ノ 春

俗^{ニム} カ^イイ^ラシ

提^テて 来^ルし 夢^ノも あ^レて 提^テて せ^ノ 色

志^ノのふの詞のこふハ

如圭

タ^シノ^フ ち^ノお^シえ^ハハ 水^ハし^チの^ハふ^ハ十^ニ 海^ノ丸

カ^シレ^シグ 志^ノの^ハい^ハみ^ハ神^ノく^ハ中^ノく^ハタ^ノド

コ^シタ^フ 志^ノの^ハい^ハれ^ハ眉^ハの^ハ西^ノの^ハ松^ノの^ハ村

日 ち^ノの^ハ昔^ノ志^ノの^ハい^ハ 以^テハ^ハの^ハ春 里^ノ丸

焼^キの^ハ二^ノ倍^ハ

下^ノ総 焼^キの^ハ丈^ノ婦^ノ 喧^ハ花^ノの^ハ下^ノ咽^ハし 梅^ノ丸

上^ノ総 屋^ノの^ハ米^ノの^ハい^ハぢ^ノ 春^ノの^ハ花^ノの^ハい

麻^ノ角^ノ解^ノの^ハ二^ノ説

自 山^ノの^ハ笑^ハの^ハい^ハぢ^ノ 麻^ノの^ハ角^ノ

他

さくさく柳子舞のまじ角ちり

卯杖粥杖の列ハ 卯杖卯榎ハ

卯杖の卯榎ハカキトシキトシキの卯杖
卯杖ハカキトシキトシキの卯杖

卯榎もろいおちくわし系福寿草

卯榎ハカキトシキトシキの卯杖
卯杖ハカキトシキトシキの卯杖

亮くぬ赤糸もくも卯杖ハ

木更

粥つえや枕のゆきに柳ハ 鶯光

打きてハカキ糸もろく粥杖ハ 梅丸

大門の山多ふ日よりの秋

杖をわたりらにす家赤豆粥

粥のゆや縁のそよみのそよ 花

七風打

田氣ハカキ糸もろく粥杖ハ

回文新ハ

佐例ハ中
卯杖ハカキ

門の松新のそよのそよつまき糸

野史福曲の歌ハ

海城の何よけや啼きよも 宗雅

兔無川のあけ流れては若の雨 鶯光

竹弓お弦もきれては音のあ 花友

荒しおちくはく水抱く子

梅鏡

双の肩をくくくくしし軍

梅丸

能取つ目もあけく松のふ

離ちや平お固のおくく車

宗智のくくくく成やも車

永きく海もあけく柳一の角

駝の葉も仁田く色や遠く

芝能くびくくくの侍のくくは西

青糸の破ふ一日松浦の

衣敷のくくくくくく角力に

雲を巻く靴ししくく頸の形

病もくくくくくくや室舟

くくくくくくくくくくのくく額

行もくくくくくくくくくく

糸度し軍もくくくくくく

二階くくくくくくくくくく

泥もくくくくくくくくくく

波辺くくくくくくくくくく

おの柔やうすけ髪の花の華太
為朝ふ似くも危く大矢ぬ
冷る風さしぬ玉ふつ
流りてふえむ心りり
くきまわつてふふこころ
おちよ作ぬ怖く百合のま
其はほろろ命危あひ見えは袖か
袂ゆるりあてしきくあてた刀
早壇抄ふらばうの海月取

忠盛

形はく月やけをきす
山花小を信らうし 結るに
之善ふ確井坂西の沖に
有はとけしは惟浅く名は
大刀奥や就中納文ありし
壁ふりしむらたのつおはの籠
殿中小お撲しかいり後の月
一先ハ巴おろし 本音 涌
細為しられハ嵐の飄る

玉筍山テ雪如仙洲わら秋の心
 所一や張飛く君の晴一酒
 車火小例の晴よの大花が
 髪のかつ氣きなま湯屋女が
 完王ハ見つるれど破子鳥
 書しれま情のあふ風つる
 素れあつ額けくま大田播
 うけえに獲奈り辯の女房が
 田村社テおつ葉の髪やうぬまこまおら

巴面賛 色白く魚しるりしと 鬼 修

かしせぬま徳の年つる 権
 うけえつる時 古帝カト
 泊おるるす家の夏つれ中衣
 逆髪の色つたの何る紙れが
 染るるる髪斗りく馬路中
 松あハ髪くくうれて 障の色
 曲節地ハ
 額向ハみで白作に
 三ふあつたをうえ

古 宗瑞

地

湖も宮くつる 後の月 梅丸

九

節

湖の水は清く静かなる月

曲

湖にありては清く静かなる月

此の曲は

真

ふくむべきは清く静かなる月

行

足飽れしは清く静かなる月

草

花より清く静かなる月

右の二を他の趣向より二条とす

文義意ハ

文

百年清く静かなる月

義

湖にありては清く静かなる月

意

湖にありては清く静かなる月

皮肉骨ハ 對例六の合のちり

皮

湖にありては清く静かなる月

肉

湖にありては清く静かなる月

骨

湖にありては清く静かなる月

此の句ハ

山天宮の遠くしは清く静かなる月

素凡

ほろく〜 言葉の火の〜

茂蘭

何より〜 毒に遠く〜

朝より〜 鴨ま〜

既醉

小鳥綱〜

籠研く〜

静きや〜

小く〜

移る〜

夕音乃〜

片

梅鏡 梅石 梅堂 梅人 此英子 鳳羽 錦水 木端 兎耳 治明 風葉

けまの〜

梅鏡

川の〜

梅石

枯葉の〜

梅堂

追風の〜

雪光

夕顔の〜

梅人

昔〜

此英子

夕陽の〜

鳳羽

虫の〜

錦水

蜻蛉の〜

木端

ありやの意一葉もささのふふ
 雲花
 貝塚の日ふく白くまのめ
 兎影
 野崎の起る峰の待示坑
 里凡
 沈極一箱紫しりくも
 梅賦
 梨の茶裏戸のてよるま
 枕石
 看るゆや咽のささる田舎
 故性ともく又逢ふ何のまの月
 丈草

倉頡制字曰

門

魏子才曰閒靜也夜深人
 定月華映門中
 閒意可
 憩玩之攸然出塵

梅花仙曰能士々々は閑の字れ風姿風情
 と修練しは遠き地仙とあつる八石
 梅丸

山城の朝
 まの目も常もやよめる霞京

△ 枕をて瓦礫の鉄きりな
まろくまろく日の入る山や紐の糸
糸のおろそま綴りておて梅のこ
庭日や夕日の方成踏りそ
何と帯の言ほむ停るに里
アキの朝らら詠む石の露
岩間を流るる光り山の月
松かけの折く花は葉子
塔かく藤と力や秋の風

草芥とまじいの燈とさるる
戸をわ風吹せも月自に
秋の夕もあつたてつて道神
舟の戸の小毎とくまの音
くく枯やあつたてつて道神
あつたてつたの花咲き夕の夕
秋風とくくく来ハ親きく
帆柱の夕日よあつたてつて
作まじい雪の白さそ夕子

疣瘰の門に追はれず汗扣
液一揚り籠り送葬の父の由
かた息をやお阿さうて川鳥
行の勺ハ

流石のうらさくお油一と毛
まゝに漏しそんハ鐘の音
汗植る改の翁さうし東下家
看経も只とくくやゆさう
そわさうあさうさうさう

来儀
金圃
如蘭
梅丸

双関

ま柳へまそさる男やまの風
さけさうさうてハ目さうさう
酒一筋さうらぬ日かハ花さう
看あやゆさう壇の太たて
形城のま揃くさうさう
池の月えさうさう扣くさう
提灯さう物いさうさう
浮草の路さうさう西極さう
月代もさうさうさう

枕

△
園ちく処のほれりるを帯ふ
い袋は浅子のるさうらわはを
き絆や物し病をいひてわ
露もさう物きてるの朝日
山は深く連糸の春の月の
あへへの可きうらう麻の
袖さしひはさしあふおを
いひしういひしうは松柳ふ
ふんら春の帯お河童のすけ

ゆきとけははあう筋角力
糸をうらうは山男
己うは能心の言わ負角力
腕がしと肩をぬく相撲うた
植ふ子る川の幸塔雲の綿の
下陰と陰し足舟のうら
露が柳の葉をさうらわは
あふく蝶の羽うらわの花
秋をうらわは声恋れし

三君より神代は美加川の子
杉之葉澤もも都の世しらす
水鳥のゆきもしあやしく他々
くまはるもあつた信のま
あはれの操備く列女傳
妻旅の糸のほろけの雨
若妻切しつゝ義人ゆめ
海の子は山に傳へるま
傾城の伝も知れぬま

名煙は鳥集るまのうら
神鳥の影くぬく飛
ゆをこそし川をわくま
神鳥の意しつゝ虎の友
大煙く引きてつゝ
水鳥や又うらま

草の匂い
尚云

産つたまの
志留のま

大力の将業師の事 四年

々々々々々々々々々々

奉納の格ハ 畧出十三種傳秘
兼諸力説アヒ取ニメス

妙見社 蛇の洞の領のゆけをまふの月

椿、 少産のうれ七血筋やま椿

側鷹、 涼一うの宿るうもとあふ松林

熊野、 苗代ハ橋まー鳥し育てし

藏王、 又平のうれは得たゆか

稻荷、 戦けふの西稻葉の湯の照り

祇園、 棧の邪アをさしおまの凡中

六所、 ちつおさよ仲ハ婿舟ゆき 貝

深嶽、 子日の^{庭を}うれをさしゆ

第六天、 竜火しをさぬ六児の山能目

虚空藏堂、 明王もゆきん梅のり月夜

薬師、 山童小生をさぬぬぢのむし

観音、 木の海はゆき怪象をさしゆ

同 寺のうれ子のゆきをさしゆ

同 あらうりて西毎とまをさしゆ

鬼子母、露の思くけくの中をさくらんや

恋ハ

神の思の如く有る梅の
胃一人のやい若くは秋の
少原の西院と二人葡萄酒

等思二人此のうらハニワ小割らん義方

無常ハ

二つしきまは
まきまき
露をとおし露く挽く二日月

代悲元天宮公羽

け年之世をまのぬくらゆ

旅ハ

頓吾亭 此のうら木や朽せん菊の園

眠江亭 今くおぬくかを秋の

此柱禪の
ニ對シテ
旅長よ、風をく那れ高き

つし能みになれぬふやをほゆん
ゆふ又例のきふよとけきいし
古き又例のきふよとけきいし
又結く

十とけいふて寔のこく城と枕小計死をハ
怪不縁極そぞおく一およくと新といひ碑と
いふて夫の神機也美小古龜波や母のひかり
治承と偏小計よのむ教えハ死柳の貴臣
毫の初名にし及んてうき麻の伴枕と一昔
のくをもしおんはくくく抑孫と枕の繁と柳
を統の回睡ハくく安・系服とくく知るハ此番
小くくめのおき器やえす彼尔口をまれば
いさくもつは法をけりて石の物ハ世しつるハ

歩草寺新ろ枕小多油りもほくく一葉の

丸、双白の辯ありれまけすれハ略と

まき草のざいんくの不句もつはけん
くは所依のそ引くしとるん多

おろろえの	あくくれみと	あまめあひんえ
を乃麻葉の	やと母一次の	あむのかくえんこ
あぢしやわ	あぢの浦の	えく波乃
あふす一	いぢ一徳	ふ代の子ら

ふらふら
きぬぬ
こころ
新小葉
かき
いし
婦之月乃
たし
さし

よのふしの
かー乃実れ
むげと根
あし
そく
はつ
はきぬ
おれ
おれ

し
一乃
あつ
あつ
あつ
あつ
あつ
あつ
あつ
あつ

くえ
高川
屋川
手
門
そ
ま
君

く
田
う
う
い
く
あ
た

く
か
か
か
か
か
か
か
か
か

唯小すり	交住りの	まほいす
おもしろ祿	こころさき	おもしろき
月日貝	梅もむ貝	うしろの
とつろ	うしろ	のけい代母
あふ事の	あふ事	あふ事
つりじり	あふ事	あふ事
たまもの	いふこと	あふ事
あふ事	あふ事	あふ事
あふ事	あふ事	あふ事
あふ事	あふ事	あふ事
あふ事	あふ事	あふ事

余奥

毛すり 荏に 修中 小吟
 林江
 さる 昼の 若さ 若さ や火の 虫
 あふ事 交も 存を 蘭の 如
 初巻の 渡り とき 枯尾 巻
 釣鳥し けり 糸 糸 糸
 蟬 鳴く や 毒に 小川の水の 音
 暗路の内 舞乃 豊の 柳
 同子 如 系 碗の 産と 水が

其九

子連の屋浦投露也午祭

祇雀

牡馬四匹塔く馬の溜り

略ししきとくうに指ををを

綱代ち物倉早ををを

地震よる涅槃に帯や維子声

蒼谷

かむやねと流う

盃のこの給毛くは火が

戦り若しまつる技をか牡丹

移すのくねをとりし柳が

鳥林

心伝小舟同あし

楚松

水心や雪くみくも葉の捨り

葉のまやうくしあぬ石う

花人

物清く浄楼のええる屋を

歌よみて雪を動も堪う形

柳水

夕風や藤にゆき人かもし見は

さねきだく柳をきくまのゆ

千丈

きれかたにもの美し清も露の

之風してまふと庭よりはれ雨

文仲

行徳

改烟之や霞乃そそぎを
梅賀

千尋の夜爰にゆけぬ牡丹子

けさ秋をせしけぬ角力うぬ

さる北家のころらりらと秋の宵

鴻の巣に世間入るは彼者か
左拱

秋草やちとくく妻の懐子
右拱

意也入て門小多すは意か
梅拾

静さ振乃る妻み柳の角
里絡

き孫息も素足に重し更衣
柳門

本枕の喧り音利まきの為
茂蘭

涼されし枕の先や柔之也
菊人

又下麻枕の夏は朝の月
亦寫字

夢もあやむかハ故道も草枕
雷斧

あ鶉と枕ふくくお年うね
李庭

朝うねのよくくく
為門

いれ樟の木を孫まぐ
梅凡

依緒の詩ハ 叟初麻石 七絶

戯
い
ま
の
ま
ま
の
ま
ま

辛苦する所の寝を押しし 枕をよみ頂すのしぬ
庭うしをち乃きうくは鳴て 和しりらぬ寝を落す

草紙ハ

卯の春や双鳥のりる 懐色子 茂蘭

眼流れく冊子の折 涼床 菊人

あつらうら双鳥の後子 萩の花 鶯言

秋の空を何んぞ 秋のそと 梅東

五月由のれと 双鳥の 桃仙

世の寝を 為揚り 子冊子 梅丸

わくふれ 山菜茶や双鳥のうて 八つ下
の酒と あり茶もも 枕をきれて あり茶が 種門

摺子おをや 繪巻のり 梅丸

春のまら 田けふ 桐一葉

春の寝か 夜す 梅丸

春のまら 田けふ 桐一葉

春の寝か 夜す 梅丸

春のまら 田けふ 桐一葉

梅丸

来儀

銀江

負盡不可論

自
自
自
自

照ハ

先凡と多をわを以て梅を

小粘をわくし踏ふ石橋

九十九夜許すの所」松巻の身

足出を場居に交の夕月

山多水里波おれそはるる

環をらるる所の入口

名月や二夜目もおれしや心

回道不批乃所はあれて
キ路とカ一とを

多し通ハ以て露落るおと

勢よりわは癖と尻の控寄り取

有明清由糸心の突

三息く結水汲むハ二日月

友子走りし言の机喜

小多しと立麻ハ二日の細雪

空の青地と繪く徳信

祝慶おほけケる時々うきうき

もわく秋も知るぬ水子

石ころを乾日向いせき音の後

松の根舟の漣よ、公法

折くにきし音何し音お

波音きしき音の日向田

はきしきしき音の潮の堤

空の音きしき音の音

音おし音をひくもの音の音

音おし音をひくもの音の音

音おし音をひくもの音の音

宗雅

九

九

九

九

九

九

九

あし——夕立の音交る音

音おし音をひくもの音の音

音おし音をひくもの音の音

音おし音をひくもの音の音

音おし音をひくもの音の音

音おし音をひくもの音の音

音おし音をひくもの音の音

音おし音をひくもの音の音

音おし音をひくもの音の音

梅人

九

九

九

九

九

九

九

九

梅志

九

九

九

九

九

九

士のゆゑに折る柳の 茂蘭

高解さるふゆ路のそ川 九

せんまゝの一本を折るきけり 梅居

袴まゝのゆきをきけり 九

あゝいふの庫裏まゝ一人泣く 一舫

西風をきけり 九

庭まゝの梅のまじり火桶の 梅人

あゝいふ名をのたふ水戸下 九

こゝろのまじりし秋の風 人

目まじしをきけり 九

梅のまじりしは 九

柳の裾をきけり 風葉

葉同様にをきけり

あゝいふに編み加ふる

人まじりしに編み加ふる

あゝいふに編み加ふる

あゝいふに編み加ふる

あゝいふに編み加ふる

あつこく筋り振うえき 梅丸

逃かハ

其之と下日けりてまき
しつきの悔ふし 松の下
未だあつこく初ふさうし
初さきハ外心と後月
紅葉しハ朝日小るる
はるるるるるるるるる
はるるるるるるるるる

半漢
ハンカ

為月と赤し珠の初ひさ
こらこらこらこらこらこら

俳諧の六藝ハ

發句 附合 故實 文章 學子力 手跡

菊の千子之子人ハ鹿や通せよの
あつこくあつこくあつこく
あつこくあつこくあつこく

いしあつこくあつこくあつこく
あつこくあつこくあつこく
あつこくあつこくあつこく

奉賀遊仙樓新成

茂松孫

石政勝

層閣新成玉樹中
四邊檐角倚長空
朱欄粉壁生雲霧
盡棟彫梁落彩虹
西望鳴鳳返河漢
東來簫鶴下回風
天工自是遊仙處
佳氣氤氳罩蕙櫳

兼者 蒼谷老叟

天明三年刊 上卷之序アリ

梅丸先生著述目錄

門人

錦水記

一 俳諧古傳

五冊

一 俳諧句法傳

三冊

一 俳諧錦繡段

古今秀逸句拾

七冊

一 俳諧鼓

全

一 拍南車

全

一 呼子鳥

猿樂ノ中ニ番叟ノコトヲ注ス
俳諧ト先祖一ナレハ也

全

一 七部解

四冊

一 常語考

十五冊

一 方言考

二冊

一 古言考

二冊

一 窓之友

古今ノ句ニ
照シナス

四冊

一 近世譚

六冊

一 藥籠和尚放語

全

一 季寄拾遺

全

一 叔彦笑話

咄ヲ譯ス

全

一 其他三教疏抄詩歌文集紀行
雜篇等百有餘卷畧之

カレ、の公行

本藏神文

